



地域活性化と経済

愛媛県・愛媛県立松山西中等教育学校 4年 富吉 悠輔

近年、山間部や離島などでは、若者が仕事を求めて都会へ出ていくことなどで人口が減少、過疎化と高齢化が進んでいることが問題となっている。過疎化が進むと、地域全体としての収入が減少し、医療や教育といった公的なサービスの提供が難しくなり^{注)}、地域社会を維持すること自体が困難となってくる。また過疎地域の中には、高齢化が極端に進み、65歳以上の人口が過半数を占める限界集落もあり、深刻な状況になっている。また、都市部においても、時代の流れとともに衰退していく商店街や地区も存在しており、自治体や政府も対策を急いでいる。

しかしながら、視点を変えてみると、過疎化が進んでいる地域には、大都市には見られない豊かな自然や美しい景観、歴史的建造物や伝統的な文化などが豊富にある場合が多い。

一部の地域では、こうした地域資源を活用した町おこし・村おこしが活発に行われている。例えば、地域の特産品をブランド化して売り出したり、観光資源を広くPRして観光客を呼び込んだりしている。これまでの地域活性化対策は国や地方自治体を中心に行われていたが、現在はそれだけではでなくNPO法人や民間団体と連携を密にしながら行われている。

私が住む松山市は、日本最古の道後温泉や松山城があり、俳人正岡子規とその周辺の人々の足跡が残る。市は「出湯と文学の街」して観光産業発展に力を入れている。私の自宅がある市西部三津浜地区も市の推進する「坂の上の雲」まちづくりプロジェクトの一環で観光資源の再開発が進められている。私は地元三津浜地区に注目したい。三津浜は戦国時代から続く港町で、河野水軍の拠点だった。明治時代、司馬遼太郎著「坂の上の雲」の主人公である正岡子規が何度も訪れて俳句を詠み、彼と秋山兄弟が上京する際に利用した港でもある。太平洋戦争末期、空襲によって松山も大きな被害を受けたが、三津浜地区は空

襲の被害を受けることなく終戦を迎えたため、江戸時代後期から昭和初期の古建築が数多く存在している。

この歴史ある三津浜地区の魅力に興味を持ったきっかけは、中学時代に建築家の木子七郎を調べた際、大正時代に建設された石崎汽船本社ビルを訪れたことだった。西洋風の建物で当時としては最新の技術を導入していた。三津浜の古建築に関する本を読んでもみると、細かな設計図や当時のエピソードが掲載されていてとても面白く、古建築に更に興味を持った。三津浜の建造物を調べているうちに、この素晴らしい建築物のある地区をより多くの人に知ってもらうために、何かできることはないだろうかと考えた。そして、文化祭で古建築の紹介とともに地域活性化の提案を発表した。

その後、地域行事に参加する中で、松山市の委託を受けた横浜の企業と地域住民による三津浜の活性化事業が進んでいることを知った。地元スタッフによる「古建築見学ツアー in 三津浜」の開催、大正時代の一銭洋食をもとにつくられた三津浜ローカルフード「三津浜焼き」をPRするためのグルメマップの作成、地域活性化を推進する団体「平成船手組」によるイベントの開催など、様々な活動が行われている。また、最近では空き家が日本全体で問題となっているが、三津浜地区では、音楽・芸術活動の拠点として生まれ変わったり、古民家を利用したおしゃれなカフェができたりしている。

しかし、レトロな街、三津浜は大きな道路が少なく、特に商店街は狭い路地が続くので車の乗り入れはできない。更に、駐車場が少ないので、三津浜へ来るには公共の交通機関を利用しなければならない。

また、現在行われている「三津の朝市」や「古建築見学ツアー in 三津浜」「みつはま生活博物館」などは不定期開催のため、観光客はまだまだ少ない状況だ。そして、三津浜地区の魅力をPRする広報宣伝活動が不十分なのではないかとも思う。

そこで、地域活性化のために私なりに考えた3つの提案をしてみたい。

まず、狭い路地を上手く活用してみてはどうかということだ。三津浜の路地は商店街のメインストリートを中心に網の目のように入り組んでいて路地を抜けた先にある古建築にたどり着いた時、まるで昔の時代にタイムスリップしたような感覚を味わうことができる。そこで、このタイムトンネルのような路地

を利用した写真コンテストやクイズラリーのようなイベントを開催して、大人から子供まで楽しんでもらうのはどうだろう。

次に、現在不定期開催のイベントを定期化してはどうかということだ。定期開催のメリットとしては、当たればより多くの集客が見込めるということだ。例えば「三津浜花火大会」は松山の土曜夜市と連動していて、毎年8月の初めに開催されており、多くの人でにぎわう。今治おんまくの花火大会と開催日が重なっても、私の見る限りでは集客数は変わらないように感じる。決してアクセスがいいとは言えない三津浜にも、楽しいイベントがあれば人は集まってくるようだ。「三津の朝市」などは人気のイベントなので、定期開催することによって名物となれば、地元松山の人だけでなく、観光客も呼ぶことができるようになるのではないだろうか。

最後に、地域の魅力を個人も積極的に発信してはどうかということだ。平成船手組やミツハマルはホームページを開設して、日々の活動を掲載している。花火大会や三津浜焼きプロジェクトの記事、三津浜の魅力を紹介したミツハマッブは楽しい。では、三津浜の魅力を個人が発信するにはどうすればよいか。自分の足で見つけた自分の好きな三津浜を伝える場所は Facebook や Twitter、旅行サイトへの書き込みなどもある。

若者が行ってみたいと思う場所、若者がまた来たいと思う場所が増えて、口コミで広がれば、地域は活性化すると思う。

このように過疎化の問題も、地域の魅力を発見し発信していくことで解決するのではないだろうか。その魅力の発見のために、更に一つの提案をしたい。それは「灯台下暗し」ということわざがあるように、その地域の地元住民では気付くことができない当たり前のようになっていることも、地域外の人々にとっては大変価値ある場合があるということだ。そのためにも、地方自治体と連携してその地域を訪問して頂く無料ツアーを企画してみてもどうだろうか。

今回は松山の三津浜地区を例として過疎化対策、地域活性化を考察したが、日本各地で行われているこれらの試みがデータベース化され、同様の問題をかかえる地域同士の連携が計られれば、より効率の良い解決策を考えることができると思う。

(注) 東京書籍『新しい社会 地理』p.176、177 を一部改変、平成 24 年

<参考文献>

- ・ミツハマルホームページ
URL <http://mitsuhamaru.com/>
- ・平成船手組ホームページ
URL <http://mitsuhama.net/funate-gumi/>

